

2020. 1. 10 (日) マラキ3 : 1～6

3:1 「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。——万軍の主は言われる。」

3:2 だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現れるとき立ってられよう。まことに、この方は、精錬する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。

3:3 この方は、銀を精錬する者、きよめる者として座に着き、レビの子らをきよめて、金や銀にするように、彼らを純粹にする。彼らは主にとって、義によるささげ物を献げる者となる。

3:4 ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々のように、ずっと以前の年々のように主を喜ばせる。

3:5 「わたしは、さばきのためにあなたがたのところに近づく。わたしは、ためらわずに証人となって敵対する。呪術を行う者、姦淫をする者、偽って誓う者、不正な賃金で雇い人を虐げてやもめやみなしごを苦しめる者、寄留者を押しつけてわたしを恐れない者に。——万軍の主は言われる——

3:6 主であるわたしは変わることがない。そのため、ヤコブの子らよ、あなたがたは絶え果てることはない。

#### <説教>

「わたしはあなたがたを愛している」と言われる主なる神の愛をイスラエルの民は信じることなく、疑っていました。

また、彼らにとっての〈父〉であり〈主人〉であるはずの神への尊敬も恐れも彼らにはありませんでした。

彼らは平気で〈汚れたパン〉〈盲目の動物〉〈足の萎えたものや病気のもの〉〈かすめたもの〉〈損傷のあるもの〉を神に献げていました。

祭司もそんな不真面目な民を咎めることなく、また民に正しいささげ物について教えることなく、平気でいい加減なささげ物を受け取って神の祭壇に献げていました。

そうやって祭司も民も、イスラエルの民は神を侮り軽んじ、また神の名を汚してしまいました。(1章)

(2章に入って) 殊に神は祭司たちの罪を指摘なさいました。

祭司たちは、自分たちも民と全く同じ罪深い者なのに、その民の中から神に仕え、神の律法を民に教えて、そうやって民にも仕える働きに召してくださった神に應えて、神への恐れをもって民を教えるべきでした。

彼らは神の〈真理のみおしえ〉を民に教え、民の〈多くの者を不義から立ち返らせ〉て、神の〈いのちと平安〉に民を与らせる〈万軍の主の使い〉のはずでした。

しかし彼らは神の御名に栄光を帰することを心に留めず、神の道を守らず、神を恐れず、人の顔色をうかがい、勝手気ままに〈えこひいきをしながら〉教え、〈多くの者を教えによってつまずかせ〉ていました。

それで神は祭司たちを厳しくお責めになりました。

あなたがたが平気で献げていたささげ物の〈糞〉を彼らの顔にまき散らす、と。

「あなたがたはそれとともに投げ捨てられる」と。

「あなたがたの祝福をのろいに変える。もう、それをのろいに変えている。」と。

そんな自分勝手に神を愛さず、神の契約を平気で破る祭司と民の態度は、人間関係でも自分勝手に人を愛さず、契約を平気で破る態度として現れていました。

人間関係の中でも一番親密な契約関係である結婚にそれは露わになっていました。

彼らは神との契約を捨てて、偶像礼拝者・異教の民と平気で結婚（雑婚）していました。

彼らは自分たちのささげ物を神が喜んで受け取ってくれない、「それはなぜなのか」と〈涙と悲鳴と嘆きで〉神に訴えていました。

それは、彼らが神を証人として契約を結んで結婚した〈伴侶〉〈契約の妻〉〈若いときの妻〉を自分勝手に〈裏切って〉〈憎んで〉離婚しているからだ、と神は言われました。

そんな〈暴虐〉にはご自分が〈暴虐〉をもって復讐するとまで〈イスラエルの神〉〈万軍の主〉は言われました。

「わたしはあなたがたを愛している。」と言われる神に、イスラエルの民はここまで言わせていたのです。

それほど神に自分たちの神、主に対する不信仰と不従順の根は深かったのです。

〈あなたがたは、自分のことばで主を疲れさせた。あなたがたは言う。「どのようにして、私たちが疲れさせたのか。」それは、あなたがたが「悪を行う者もみな主の目になっっている。主は彼らを喜ばれる。いったい、さばきの神はどこにいるのか」と言うことによつてだ。〉(2:17)と神は言われました。

〈疲れること〉のない(イザヤ 40:28)はずの神を〈疲れさせる〉ほどの、それは民の深く限らない罪の姿であり、罪を罪とさえ認められない、無知、無感覚、無自覚でした。

そしてそれは同時に〈さばきの神〉についての無知、無感覚でもありました。

「さばき」とは法廷(裁判)用語で、「正しい判決」「公正」「義」等の意味です。

「いったい、さばきの神はどこにいるのか」となおも神への不信、不満、無知を露わにするイスラエルの民に対して、神は宣告なさいました。

それは〈さばきの神〉ご自身が彼らのいる地上に来られて、ご自身を彼らに現し、ご自身のことを彼らに知らしめるということでした。

そして彼らに神の義をますます明らかに示し、彼らの罪を打ち砕いて、彼らを〈きよめる〉ということでした。

〈「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。——万軍の主は言われる。〉(3:1)

神が〈わたしの前に道を備える〉ために〈遣わす〉〈わたしの使い〉とはバプテスマのヨハネのことでした。

そして「あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。」と言われました。

「悪を行う者もみな主の目になっっている。主は彼らを喜ばれる。いったい、さばきの神はどこにいるのか」と言って神を蔑んでいる彼らのところに突然〈来る〉〈彼〉、〈その神殿に来る〉〈主〉なるお方、神であるお方とは、イエス・キリストのことにほかなりま

せんでした。

確かに当時もイスラエルの民はメシヤを、〈尋ね求めて〉〈望んで〉はいたはずで。

しかしどうやら彼らはそのお方が自分たちをおさばきになる、義なる神、〈さばきの神〉だとは考えていなかった（またはそのようには〈求めて〉〈望んで〉いなかった）ようです。

それもまた祭司たちが主なる神について、神の義と神の（本当の）愛について、神の律法から、律法に定められた様々な動物の犠牲のささげ物等から正しく教えていなかったからでした。

結局祭司たちは人々に神の義、さばきについては語らず教えず、罪を罪として指摘することもなく、神の愛といっても「神は愛でお優しいから少しぐらいの罪は見ても見ぬ振りをして見逃してくれるさ」などと彼らを甘やかしてくれる者、彼らが仕えるのでなくて彼らの言いなりに彼らの欲望に仕えてくれる、とにかく自分たちに都合の良い神しか示していませんでした。

そんな祭司たちに代わって、唯一の真の大祭司として神のひとり子、神であられるイエス・キリストが人となってこの世に来てくださいました。

そして人の、私たちの罪をその身に負ってくださり、私たちの罪のために十字架で死なれ、罪に対する神のさばきを私たちのために受けてくださり、三日目に復活して死にも打ち勝ってくださいました。

そのようにして神の義と愛を余すところなく世の人々に、私たちに教えてくださいました。

「さばきの神、義の神はここにおられる」と、神のことを人々に教えてくださいました。

イエス・キリストのみことばとみわざによってのみ、私たち人間は神を、その義と愛を知るのです。

そしてイエス・キリストを信じて、イエス・キリストにあって、私たちは罪の汚れを洗いよめられるのです。

そして、この地上の生涯が続く限りは完全ではなく、日々罪を犯す者ですが、日々その罪を悔い改めて、神に立ち帰りつつ、誘惑と闘い罪と闘いもがきつつも精一杯神と人を愛して生きるのです。

そうやって罪に支配された「古い人」に日々死んで、キリストにある「新しい人」にのみがえらされて生きるのです。

そうやって少しずつ、一步一步、〈きよめる者〉(3)であられるキリストによって〈精錬〉(2,3)され、〈純粹〉にされて行くのです。

それは〈レビの子らをきよめて、金や銀にするように、彼らを純粹にする〉(3)キリストのみわざです。

ご自身を完全な義の（従順の）ささげ物として十字架で神にお献げになり、神に喜んで受け入れられたキリストが、それまでは汚れた物、傷物、余り物を神に献げて平気でいた者どもものところに来てその罪を示し、悔い改めさせていただきます。

そして〈主にとって、義によるささげ物を献げる者〉(3)、〈主を喜ばせる〉ささげ物(4)を献げる者としてくださいます。

使徒パウロが言うように、自分自身の〈からだを、神に喜ばれる、生きたささげ物とし

て献げ)て、神のあわれみ(イエス・キリスト)によって神の義と愛を知った者にふわさしい礼拝(ローマ 12:1)を神にささげる者としてくださいます。

かつては神に喜ばれず受け入れられない思いとことばとささげ物で神を怒らせ、疲れさせ、そんな礼拝などやめてしまえとまで言われた罪はそのようにしてキリストによって、キリストにあって克服されるのです。

〈万軍の主〉なる神はキリストによって〈さばきのためにあなたがたのところに近づく〉と言われました。(5)

〈呪術を行う者、姦淫をする者、偽って誓う者、不正な賃金で雇い人を虐げてやもめやみなしごを苦しめる者、寄留者を押しつけてわたしを恐れない者〉を見逃すことなく、むしろ〈ためらわずに証人となって敵対〉し、おさばきになるのです。

キリストは正しい証人として(そして裁判官としても)、被害者の側に立って、「最も小さい者たちの一人」(マタイ 25:40,45)の味方となって、ここで言われているような罪、不正、不法を正しくおさばきになります。

呪術、姦淫、偽りの誓い、不正な賃金で雇い人を虐げてやもめやみなしごを苦しめること、神を恐れず寄留者を押しつけること、これらは雑婚や離婚と同じように当時のイスラエルの民の間で行われていたことなのでしょう。

これまで聞いてきたように、神は実に厳しい言葉の数々をもって、また言葉だけでなく実際にみわざによってご自分の民イスラエルにさばきを宣告なさいました。

しかしそれは単なる恨みつらみにまかせた冷酷非情なさばきと言うよりは、むしろ実はその反対です。

それは神を見失い、神に対する無知、無感覚に陥っている彼らが改めて神ご自身を知るように、彼らが神の義と愛を知って、神に立ち帰るためにどうしても必要な懲らしめと言うべきものでした。

ご自分の民を愛しあわれむことにおいて「主であるわたしは変わることがない」と神は言われます。(6)

神はご自分の民をご自身の子としてお取り扱いになり、養い、お育てになるのです。

たとえ彼らを厳しくお責めになっても、罰することがあっても(実際あるのです)彼らを〈絶え果てる(新改訳三版他「滅ぼし尽くす」)〉ようにはなさいません。

彼らに神の義と愛を告げ知らせ、〈神を解き明かされ〉る(ヨハネ 1:18)ためにイエス・キリストは神であり人であるお方としてこの世に来られました。

罪人に神を知らせ、〈罪人を招いて悔い改めさせるために〉(ルカ 5:32)、キリストを信じる信仰を与え、神の究極の永遠のさばきから救い、彼らを〈精錬〉し〈きよめ〉、ご自分に似た者すなわち神と人を愛する者に造り変えるために、そうやって神の栄光を現すためにイエス・キリストは私たちのところに来てくださったのです。

そして今度は最終審判のため、ご自分にあって選んでくださった私たち罪人の救いの完成のために再び来てくださるのです。